



第 11 回：連合三重（日本労働組合総連合会三重県連合会）

労・使・行政、三方良し。腹を割った WIN-WIN な関係性が耕す
土壌に育む、地域のための活動

— ステップアップカフェの取り組みから紐とく、協力・連携のありかた

事務局長 藤田 和彦 氏

副事務局長 廣瀬 純子 氏

連合三重が関わる障がい者雇用の取り組み「ステップアップカフェ」が、2024 年 12 月、その 10 年の歴史に幕を閉じた。取材を申し込むと、この取り組みが労使そして行政で行うさまざまな協力連携の取り組みの一形態であるとのことで、お話をうかがった。

1. 労・使・行政の連携

1) ステップアップカフェと三重労使雇用支援機構

— ステップアップカフェのお取り組みについてお聞かせください。

【藤田】 ステップアップカフェは、障がい者雇用促進をめざして 2014 年に始まったカフェ事業です。三重県の障がい者実雇用率が全国最下位だった事実を受け、三重県総合文化センター内にて「Cotti 菜」（こっちな）としてスタート、2020 年には「だいだい食堂」となり、障がいをもつ人がいきいき働き、仕事を通してチャレンジしていけるよう「ステップアップ」をめざすカフェとして運営してきました。10 年間事

業を続けるなかで、三重県内各地域で障がいをもつ人が働ける職場が増えてきたこと、障がい者実雇用率も上がってきたことを受けて、12 月 18 日に開催したファイナルイベントをもって事業終了となりました。

— ステップアップカフェは県としての取り組みでありながら、三重県経営者協会と連合三重が立ち上げた「三重労使雇用支援機構」が事業運営の支援をされてきたとうかがいました。

【藤田】「三重労使雇用支援機構」（以下、「同機構」）は 2009 年、労使の相互理解の下、経営の安定と雇用の維持・確保に協力して取り組むことを目的に設立されました。2012 年には、1997 年から続いていた労・使・行政で構成する「みえ雇用創出会議」の業務を引き受けることとなり、現在、三重県経営者協会と連合三重に加え、オブザーバーとして三重労働局や三重県商工会議所連合会など行政や経済団体のメンバーで構成されています。三重県の経営者団体

とともに実施する年2回の労使会議では、同機構での取り組みについても話し合います。ステップアップカフェも同機構で事業運営に関わりましたが、このように労使で組織を設けて一緒に事業に取り組むという形態は全国で三重県くらいだと聞きました。ステップアップカフェ事業のように、連合三重が障がい者を含めた働く人々の働きやすい環境づくりを訴える窓口となり、経済団体、行政に問題提起をしながら、労・使・行政がタイアップして課題に取り組んでいくことが大事なのだと思います。

一同機構として、ステップアップカフェのほかにはどのような取り組みをされていますか？

【藤田】「働きやすい職場づくりセミナー」など、三重県が主催するイベントやセミナーの運営や共催をしています。また「みえの労使協働による仕事と結婚・子育て等の両立促進に関する調査」など、必要に応じて一緒にアンケートにも取り組んでいます。最近では、カスハラ条例策定に際した議論のなかで、労働者や経営者にたいするアンケートの依頼を県から受け、同機構で実施しました。連合三重では、構成組織を通じてサービス業、運輸業、介護職等、さまざまな業種で就労される組合員のかたに回答いただきました。

一同機構があるから、県は労使両方の声を同時に集めることができたんですね。

【藤田】三重県では、労使に加えて行政も含めた3者の連携が多いかもしれません。労働者側と使用者側の意見を同時にアンケートで知ることができるというのは、行政にとってもすごくありがたいようです。それができるのは、同機構があるからだだと思いますね。労・使・行政の3者がWIN-WINかなと思います。



事務局長
藤田 和彦氏

2) 労・使・行政の連携を育む土壌

一同機構をはじめとした労・使・行政の連携がうまく機能している理由は、どのようにお考えですか？

【藤田】まずは、労使の間で蓄積されてきた人間関係でしょうか。要職に就く方々がその時々において日頃からの関係性を大事に育んできたことが背景にあると思います。経済団体との関係に近い印象です。いがみ合っている感じがあまりしない。春闘が始まって、各団体の会長のところへ要請行動に行くと、「なんとかしないとあかん」「でも中小企業も大変やねん」と、お互い腹を割って話すんですね。「使」のみなさんは、労働組合の役割を理解してくれていますし、経営者協会の会長からも「(同機構のような関係性は)ありがたい」と言われます。様々な会議や審議会で会う頻度も高いので、さらに関係性が育まれます。

行政との関係については、労働者の声を県政に取り入れてもらえるよう政策を訴える土壌づくりが歴史的になされてきたことがひとつ考えられます。また、知事との懇談の機会も多く、三重県が抱える課題の認識について知事から率直に共有されるというのも、関係性があってのことだと理解しています。先日の労働局との件は印象的でした。三重県の障がい者実雇用率の

順位が一昨年から昨年にかけて下がったことについて、理由をわざわざ労働局から私たちのものとへ説明しに来てくれたんです。私たちも日ごろ要請などしていますが、こちらもしっかりやっているから、行政のみなさんも「きちんと情報共有しよう」と思われるのかもしれませんがね。

—それぞれ立場は違うけれど、互いに率直に話し、「めざすものは同じ」と捉え、具体的な取り組みを一緒に行うことで、推進する力も高まるのではないかと思います。

【藤田】2024年4月には「適正な取引と価格転嫁を促進し地域経済の活性化に取り組む三重共同宣言」を県内の15機関・団体で行うなど、労・使・行政で連携していますが、「みえ雇用創出会議」の頃から労・使・行政のトップが集まり、議論し、協力してきた蓄積があるからこそ、ステップアップカフェ事業のように、労・使・行政共通の課題として一緒に考え取り組むことができるのだと思います。

—地方連合会による寄付講座の講師は地方連合会ごとに多様であるとお見受けしますが、三重大学で実施されている寄付講座では経済団体や行政のかたも登壇されているとおうかがいしました。

【藤田】連合三重では講師として労働局や経営者協会に依頼したり、社労士のかたに来ていただいたりしています。県から雇用対策の課長が来られて「働くこと」について話していただくこともあります。みなさん、講師の依頼を快く引き受けてくださいます。

【廣瀬】学生に話をする機会は、引き受けていただく方々にとっても貴重だそうです。

【藤田】諸先輩が創りあげてきた労・使・行政の関係性は、これからも続けていきたいと思います。

3) 「ステップアップ」の様子

—ステップアップカフェ事業の運営を経て、現場での変化はどのようにお感じになられていますか？

【藤田】私も廣瀬もステップアップカフェが始まった当初から携わっているわけではないのですが、ステップアップカフェから一般就労に「ステップアップ」されたかたへの表彰や、青年委員会が企画したクリスマスイベントなど、何度かカフェへ訪問する機会がありました。食事をして、働かれているかたの様子も拝見したのですが、運営事業者の経営者の方々もおっしゃるように、いきいきとすごく楽しく働いておられる印象を受けました。それから、お食事がとても美味しいんですよ。連合三重の三役会議を行う際にはお弁当を注文したり、執行委員会の後の懇親会などでも利用させていただきました。

【廣瀬】障がい者のかたがされてるからではなく、本当に美味しいから利用しようという気持ちになりましたね。

【藤田】ステップアップカフェの立ち上げ以来、三重県内に障がいをもつかたが働ける場所が増えてきました。松阪市に「お菓子工房 M」というお店があるのですが、連合三重の旗開きで、300名くらいの参加者全員に、ここで作っていただいたクッキーを配るんです。このクッキーもすごく好評です。

【廣瀬】「働いてお金を稼ぐ」ということと、「直接お客様と触れ合って『ありがとう』と言われる」ことが大きな自信になられたとおっしゃっ

ていました。自分が社会の一員として認められたと感じられて、いきいき働かれている印象を受けました。

—そこで働かれるかたが、働くことに喜びを感じられるような場を作ることができたということなのですね。

【廣瀬】ここから7名の方が、一般就労に文字通り「ステップアップ」されました。

【藤田】経営者の方々と話をしていると、「障がい者雇用についてしっかり取り組まないといけない」というトップの考えが大事だと思いましたね。

【廣瀬】各事業所で障がい者の法定雇用率を達成するために、障がい者のかたがどちらかと言えば今「売り手市場」になってきているようです。今まで同機構で取り組んできた「ステップアップ」の役割は一旦終わり、次の段階に移ったと感じています。

【藤田】「働く」という観点から少し外れますが、わたしが青年委員会を担当していたときに、委員会のメンバーで障がい者福祉施設に見学に行ったり、障がいをもつ方々を招いてバーベキューや「ポッチャ」（パラスポーツの一つ）をして交流する機会を設けたことがありました。すると当事者の方々が「本当に楽しかった」と喜んでくださったそうで、お手紙までいただきました。青年委員会のメンバーも「喜んでもらえてとてもよかった。すごく勉強になった」と言っていました。ステップアップカフェの「ステップアップ」には、障がいをもつ方々が働く姿を見ることで、社会全体が理解を深め「ステップアップ」するという意味も込められています。障がいをもつかたが働く職場も増えて、雇用の



副事務局長
廣瀬 純子 氏

状況は一定改善されてきましたが、今後連合三重として、また同機構としてどのようにしていくか、議論の必要があると思っています。

2. 国民運動—フードドライブと災害支援

—フードドライブの取り組みも力を入れ始めたとのことでお聞きました。

【藤田】これまで連合三重としては、子ども食堂への支援やフードドライブ活動には取り組んでいなかったのですが、「継続して誰もが気軽に参加できる社会貢献活動」として、今年の三重県中央メーデーにてキックオフイベントを行いスタートさせることにしました。集まった食料は三重県社会福祉協議会を通して子ども食堂などの団体に届きます。組合員のみなさんにどのように協力要請するのがいいのか話し合いながら、準備を進めているところです。

【廣瀬】子どもの貧困の問題や子ども食堂への支援については、連合としてなにかできないかとずっと考えていました。食料を寄付する団体をこちらで選定したり判断したりするのが課題でしたが、三重県社会福祉協議会で寄付先の団体とマッチングしていただけることになり、トライすることに踏み切りました。

—以前からやりたい気持ちはあったけれども、なかなか踏み切れなかったのですね。

【廣瀬】やるからには、長く続けたかったという思いがありました。双方の担当が変わり関係性が引き継がれなくなると、支援が途切れてしまう可能性があります。社協を通じることで、長く、みんなで継続できる体制を整えられたのでスタートさせることができました。

—連合三重として個別に関わる CSO（市民社会組織）はありますか？

【藤田】連合三重として日常的に関わる CSO はとくにないです。「連合・愛のカンパ」は、構成組織や地域協議会からの推薦に応じたかたちで助成しています。また各種委員会で視察研修を実施したり、連合三重で政策制度要求をしたりにあたって、県に相談し紹介してもらった NPO 等に視察をさせていただくかたちで接点を持っています。

【廣瀬】単組、産別、連合はそれぞれ役割が違うので、連合としてできること、連合だからできることというのは、特定の NPO とつながるというよりも「運動の流れをつくっていく」ということが大切かな、と考えています。

—災害支援については、NPO 法人「みえ災害ボランティア支援センター」と連携されているとのことでお聞きしました。

【藤田】「みえ災害ボランティア支援センター」については、災害時の活動支援金の寄付や、ボランティア派遣時の受け入れ窓口として連携させていただいています。例えば、2018 年西日本豪雨災害時には、同センターが実施する「みえ発！ボラパック 広島行きボランティア」に

参加しました。組合員が参加する場合、参加費の半額を連合三重が負担するというかたちでタイアップし、全 7 クールで総勢 36 名の組合員のかたに参加いただきました。わたしも第 1 便で行きました。2024 年の能登半島地震では、「連合・労福協チャリティゴルフコンペ基金」から 30 万円を同センターでの活動のための支援金として贈呈しました。

—私も 2011 年の台風 12 号による豪雨災害時には、紀宝町にボランティアに行きました。

【藤田】当時、紀宝町の社会福祉協議会へ自治労が支援に入ったのですが、実はこの後、紀宝町の社協で労働組合が立ち上がったんですよ。災害のときに労働組合は協力してくれるのだ、とありがたみを感じていただいたようです。とくに災害時には、組合は組織的に動き、体制を整えて支援します。そこが組合の素晴らしさのひとつだと感じますね。

3. 取り組みにかける想い

—お二人が連合三重での運動、地域への取り組みに携わる上で、大事にしていращやることをお聞かせください。

【藤田】私は元々、スポーツから始まる人のつながり作りや地域貢献がたくて役場職員になりました。教育委員会に配属されていたときは、楽しくて、土日や夜も夢中になって企画の立案などに取り組んでいました。地協の役員をしていたときも、地域に根差した活動を意識しながら活動を行い、地域での祭りやイベントでの清掃活動などを行ってきました。今後も、支え合い、助け合う社会づくりのために地域貢献する取り組みを行うことが労働組合の活動として大事だと思います。

【廣瀬】大学を卒業してすぐに結婚し三重県に来ました。三重出身ではなかったため周りに知り合いもおらず、子育て中はずっと自分が社会から隔離されているように感じていました。この土地では「○○○ちゃんのお母さん」「○○○さんの奥さん」という自分しかおらず、働き始めてようやく、私個人として、社会の一員になれたような気がしました。ステップアップカフェの話にも通じますが、「働く」ということは、「自分が社会の一員として認められる」ことを感じられる、すごく大きな意味のあることだと心から実感しました。また、子どもが高校に入って不登校になったのですが、仕事をきっかけに社会に復帰できたのを見て、改めて「働くことの持つ力」を感じました。「働くことで人が幸せになったらいいな」「みんなが幸せに働けたらいいな」という想いで、良い仕事環境などについて少しでも多くの人に知っていただけるよう活動しております。

【藤田】連合三重としては、「助け合い」の活動をしている組織として、より社会的に認知されるといいなと思いますね。

—今後お二人が取り組んでいきたいことや課題感としておもちのことがありましたら、お聞かせください。

【藤田】労働組合の意義を広めながら、仲間を増やしていきたいですね。たとえば春闘であれば、仲間とともに労働組合を結成して労使でしっかりと協議することで自分たちの賃金を上げていける、ということを社会全体に伝えて、1人でも多くの人と労働組合運動を一緒にしたいなと思います。

【廣瀬】男女雇用機会均等法ができて、今年でちょうど40年になります。働く女性は増えていますが、どこか女性を「付属物」として扱いたい風潮が未だに社会にあるような気がしています。これまでの社会が誰かの我慢の上で成り立ってきたということにそろそろ気づいて、誰もが一個人として扱われるような社会になってほしいなと思います。

組織概要

構成組織：38 産業別労働組合、10 地域協議会

組合員数：128,668 人（2024 年 7 月 1 日現在）

結 成：1989 年 12 月 1 日

URL <https://rengo-mie.jp/>

（インタビュー日：2025 年 2 月 28 日）

このインタビュー連載は、2024 年 5/6 月号よりスタートしました。地方連合会の連帯活動は、組織（地域）ごとに特色があり、多様な活動が展開されています。この活動に光をあて、地域の運動がどのように紡がれてきたのか、また、これからどのように展開していくのか、インタビューをつうじて（再）発見できればと考えています。